

2017年12月までの最新の経済情勢を織り込み、マクロ計量モデルなどを用いて、2017年度、2018年度の全国、北陸3県（富山県、石川県、福井県）、東海3県（岐阜県、愛知県、三重県）、中部5県（長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県）の経済見通しについて分析を行ったので報告いたします。

ホームページにて、上記の経済見通しと中部9県の各県ごとの経済見通しを公表しておりますので、ぜひご利用ください。（経済見通しURL http://www.criser.jp/bunnseki/keizai_mitoshi-c9.html）

なお、今回のレポートに関して、中日新聞、北陸中日新聞、北國新聞、富山新聞、北日本新聞、長野市民新聞、日本経済新聞の静岡版、読売新聞の富山版、電気新聞に掲載されました。

2017年度・2018年度 経済見通し

公益財団法人中部圏社会経済研究所経済分析・応用チームリーダー 島澤 諭
 公益財団法人中部圏社会経済研究所経済分析・応用チーム研究員 難波 了一

1. 全国

◆2017年度

景気は、設備投資と輸出の堅調な増加、消費の着実な拡大で、緩やかな回復が続き、前年度比+1.9%

世界経済が堅調に推移する中、円相場が円安傾向で推移することもあり、輸出の堅調な増加と企業業績の改善により、生産や設備投資が着実に増加する。

家計部門では、引き続き、雇用・所得環境が着実に改善することから、個人消費はプラスに寄与する。一方で、住宅投資は、相続税の減税対策と低金利を背景に増勢が続いた貸家の住宅着工が転機を迎え、2017年中に減少に転じることが見込まれる。

その結果、全国の実質経済成長率は、前年度比+1.9%と3年連続のプラス成長を見込む。各需要項目の寄与度を見ると、民間最終消費支出、民間企業設備がそれぞれ+0.6%ポイント、+0.6%ポイント、外需等が+0.5%ポイントと、民間需要、外需ともに成長に寄与する。

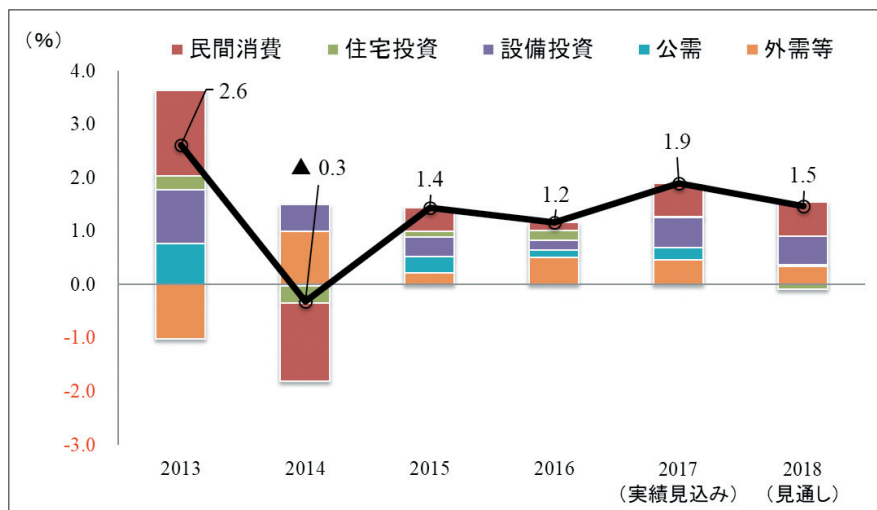
◆2018年度

景気は、消費の更なる拡大と世界経済の堅調な推移を背景に、緩やかな回復が続き、前年度比+1.5%

世界経済が堅調に推移する中、企業部門では、引き続き輸出や生産が増加していく。企業業績は引き続き堅調に推移し、人手不足に伴う自動化や省力化等の設備投資が増加する。

家計部門では、所得環境が緩やかに改善してい

図1 全国の成長率と寄与度



計数表

※ 内閣府推計は、平成 29 年度内閣府年央試算（2017 年 7 月 14 日）

	全国（連鎖方式、2011 年基準）			【参考】内閣府推計	
	2016 年度 （実績）	2017 年度 （実績見込み）	2018 年度 （見通し）	2017 年度 （実績見込み）	2018 年度 （見通し）
実質国内総生産 （支出側）	1.2	1.9	1.5	1.5	1.4
（変化率（%）、括弧内は寄与度）					
民間最終消費支出	0.3 (0.2)	1.1 (0.6)	1.1 (0.6)	0.9	1.1
民間住宅	6.2 (0.2)	0.6 (0.0)	-2.6 (-0.1)	0.8	1.3
民間企業設備	1.2 (0.2)	3.6 (0.6)	3.4 (0.6)	3.6	3.6
公需	(0.1)	(0.2)	(0.0)	(0.4)	
外需等	(0.5)	(0.5)	(0.3)	(0.2)	(0.2)

（注 1）本見通しは、中部圏の経済見通し作成のためになされたものである。

（注 2）公需は、政府消費、公的固定資本形成の寄与度。

（注 3）外需等は、移輸出から移輸入を控除した移輸出（純）等の寄与度。

（注 4）端数処理の関係で合計が一致しないことがある。

【前提】

1. 世界GDP（日本除く）、円相場、原油輸入価格については、以下の前提を置いている。

	2017年度	2018年度
世界GDP（日本除く）の実質成長率（%）	3.5	3.4
実質実効為替レート	75.2	74.1
円/ドル	112.0	112.9
円/人民元	16.7	17.0
原油輸入価格（ドル/バレル）	53.1	54.8

（注 1）世界GDP（日本を除く）の実質成長率は、国際機関の経済見通しを参考に算出。

（注 2）実質実効為替レートは、米ドル、ユーロ、人民元等、対象となる全ての通貨との為替レートを、貿易額等でウエイト付けしたもの。先行きについては、足元のレートで一定と想定。

（注 3）原油輸入価格は、足元の価格と国際機関の見通しをもとに算出。

2. 国内の金融政策については、現在の緩和的な金融政策が継続されるものとしている。

くことから、個人消費も着実に増加する。一方で、2017年中に減少に転じた住宅投資は引き続き低迷することが見込まれる。

その結果、全国の実質経済成長率は、前年度比 +1.5%と 4 年連続のプラス成長を見込む。各需要項目の寄与度を見ると、民間最終消費支出、民間企業設備がそれぞれ +0.6%ポイント、+0.6%ポイント、外需等が +0.3%ポイントと、2017年度と比べると、外需等がやや減速し、住宅投資がマイナスに寄与するが、引き続き、民間需要、外需ともに成長に寄与する。

なお、①欧米の経済政策などが国際金融市場な

どに与える影響、②地政学リスク、③中国経済の下振れリスク、④企業部門における人手不足の深刻化、などが懸念材料として挙げられる。

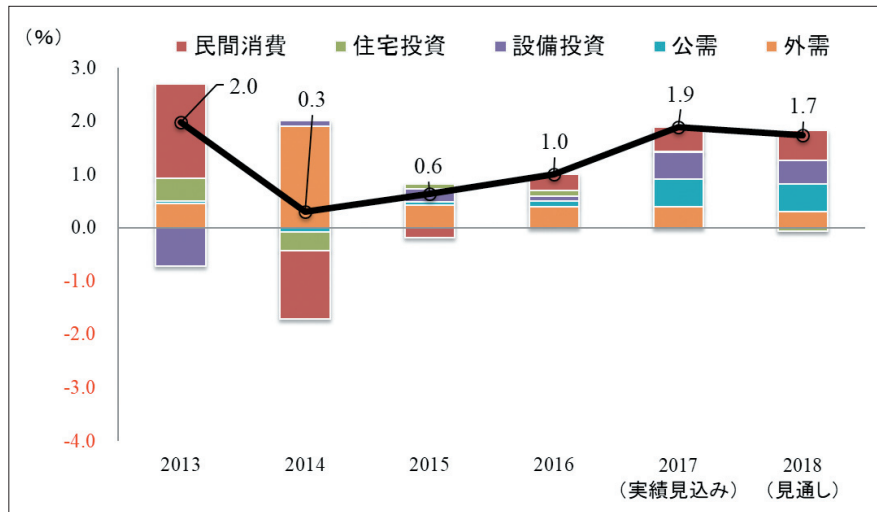
2. 北陸 3 県

◆2017年度

北陸 3 県経済は、消費の着実な拡大と輸出の堅調な増加で、緩やかな回復が見込まれ、前年度比 +1.9%

前回経済見通し（年央改定）との比較では、成長率に変更はない。企業の2017年度設備投資計画

図2 北陸3県の成長率と寄与度



計数表

※ 表中の「前回」は2017年9月8日公表の経済見通し(年央改訂・試算)

	北陸3県(固定基準年方式、2005年基準)						【参考】全国		
	2016年度 (実績)		2017年度 (実績見込み)		2018年度 (見通し)		2016年度	2017年度	2018年度
	前回	今回	前回	今回	前回	今回	上段:内閣府推計	下段:弊所推計	
実質域内総支出	1.0	1.0	1.9	1.9	1.8	1.7	1.2	1.9	1.8
(変化率(%))、括弧内は寄与度									
民間最終消費支出	0.6 (0.3)	0.6 (0.3)	0.8 (0.5)	0.8 (0.5)	0.9 (0.6)	1.0 (0.6)	0.3 (0.3)	1.2 (1.1)	1.4 (1.1)
民間住宅	6.0 (0.1)	6.0 (0.1)	0.2 (0.0)	0.1 (0.0)	0.2 (0.0)	-2.8 (-0.1)	6.2 (6.2)	1.1 (0.6)	0.6 (-2.6)
民間企業設備	0.5 (0.1)	0.5 (0.1)	3.4 (0.5)	3.9 (0.5)	2.9 (0.4)	3.3 (0.4)	1.2 (1.2)	3.4 (3.6)	3.9 (3.4)
公需	(0.1)	(0.1)	(0.5)	(0.5)	(0.5)	(0.5)	(0.1) (0.1)	(0.3) (0.2)	(0.1) (0.0)
外需等	(0.4)	(0.4)	(0.4)	(0.4)	(0.3)	(0.3)	(0.5) (0.5)	(0.3) (0.5)	(0.2) (0.3)

(注1) 公需は、政府消費、公的固定資本形成の寄与度。

(注2) 外需等は、移輸出から移輸入を控除した移輸出(純)等の寄与度。

(注3) 端数処理の関係で合計が一致しないことがある。

(注4) 参考値として、実質域内総生産(連鎖方式、2005年基準)の見通しも公表する。

ただし、県民経済計算では、支出側系列については、連鎖方式では推計していないため、本見通しも総生産のみとする。

【参考】北陸3県(連鎖方式、2005年基準)			
	2016	2017	2018
実質域内総生産	1.0	1.9	1.7

【参考】富山県、石川県、福井県の経済見通し

	2017年度	2018年度
北陸3県(再掲)	1.9	1.7
富山県	1.7	1.3
石川県	2.0	1.8
福井県	2.0	2.3

(注1) 富山県の経済見通しの詳細については、弊所「2017・2018年度 経済見通し(富山県)」を参照。

(注2) 石川県の経済見通しの詳細については、弊所「2017・2018年度 経済見通し(石川県)」を参照。

(注3) 福井県の経済見通しの詳細については、弊所「2017・2018年度 経済見通し(福井県)」を参照。

【前提】

1. 世界GDP（日本除く）、円相場、原油輸入価格については、以下の前提を置いている。

	2016年度 (実績)		2017年度		2018年度	
	前回	今回	前回	今回	前回	今回
世界 GDP（日本除く）の実質成長率（%）	3.0	3.0	3.5	3.5	3.4	3.4
実質実効為替レート	79.9	79.9	76.9	75.2	76.8	74.1
円/ドル	108.4	108.4	112.1	112.0	112.4	112.9
円/人民元	16.1	16.1	16.5	16.7	16.6	17.0
原油輸入価格（ドル/バレル）	47.3	47.3	52.5	53.1	52.2	54.8

（注1）世界 GDP（日本を除く）の実質成長率は、国際機関の経済見通しを参考に算出。

（注2）実質実効為替レートは、米ドル、ユーロ、人民元等、対象となる全ての通貨との為替レートを、貿易額等でウエイト付けしたものの、先行きについては、足元のレートで一定と想定。

（注3）原油輸入価格は、足元の価格と国際機関の見通しをもとに算出。

2. 国内の金融政策については、現在の緩和的な金融政策が継続されるものとしている。

の上方修正や、世界経済の足元での堅調さは、前回想定していたとおりである。

世界経済が堅調に推移する中、円相場が円安傾向で推移することもあり、輸出の堅調な増加と企業業績の改善により、生産や設備投資が着実に増加する。

家計部門では、引き続き、雇用・所得環境が着実に改善することから、個人消費はプラスに寄与する。

北陸新幹線の金沢・敦賀間の建設本格化から、公共投資が増加し、公需はプラスの寄与となる。

その結果、北陸3県の実質経済成長率は、前年度比+1.9%と5年連続のプラス成長を見込む。各需要項目の寄与度を見ると、民間最終消費支出、民間企業設備、公需がそれぞれ+0.5%ポイント、+0.5%ポイント、+0.5%ポイント、外需等が+0.4%ポイントと、民間需要、公需、外需いずれも成長に寄与する。

◆2018年度

北陸3県経済は、消費の更なる拡大と世界経済の堅調な推移を背景に、緩やかな回復が続き、前年度比+1.7%

前回経済見通し（年央試算）との比較では、住宅着工の想定以上の落ち込みを受けて、成長率を-0.1ポイント下方修正した。

世界経済が堅調に推移する中、企業部門では、引き続き輸出や生産が増加していく。企業業績は

引き続き堅調に推移し、人手不足に伴う自動化や省力化などの設備投資が増加する。

家計部門では、所得環境が緩やかに改善していくことから、個人消費も着実に増加する。

その結果、北陸3県の実質経済成長率は、前年度比+1.7%と6年連続のプラス成長を見込む。各需要項目の寄与度を見ると、民間最終消費支出、民間企業設備、公需がそれぞれ+0.6%ポイント、+0.4%ポイント、+0.5%ポイント、外需等が+0.3%ポイントと、2017年度と比べると、民間企業設備と外需等がやや減速するが、引き続き、民間需要、公需、外需いずれも成長に寄与する。

なお、①欧米の経済政策などが国際金融市場などに与える影響、②地政学リスク、③中国経済の下振れリスク、④企業部門における人手不足の深刻化、などが懸念材料として挙げられる。

3. 東海3県

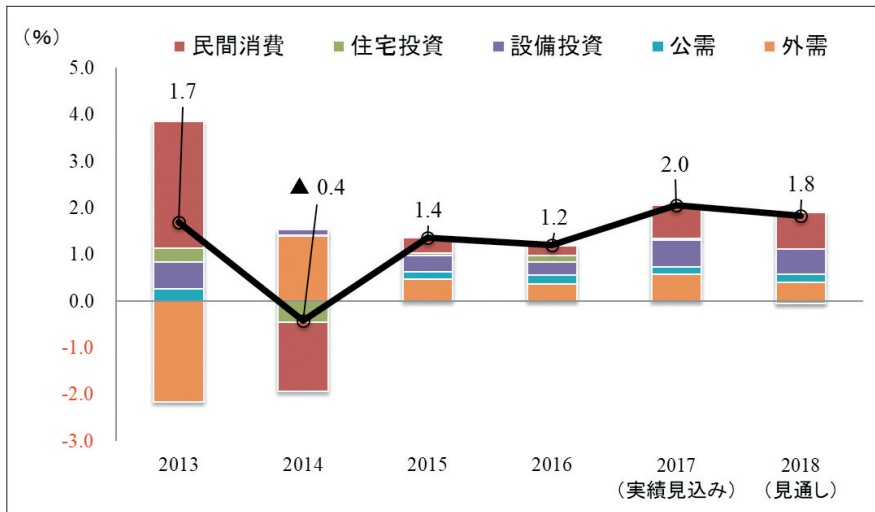
◆2017年度

東海3県経済は、消費の着実な拡大と輸出の堅調な増加で、緩やかな回復が続き、前年度比+2.0%

前回経済見通し（年央改定）との比較では、成長率に変更はない。企業の2017年度設備投資計画の上方修正や、世界経済の足元での堅調さは、前回想定していたとおりである。

世界経済が堅調に推移する中、円相場が円安傾向で推移することもあり、輸出の堅調な増加と企

図3 東海3県の成長率と寄与度



計数表

※ 表中の「前回」は2017年9月7日公表の経済見通し（年央改訂・試算）

	東海3県（固定基準年方式、2005年基準）						【参考】全国		
	2016年度 （実績）		2017年度 （実績見込み）		2018年度 （見通し）		2016年度	2017年度	2018年度
	前回	今回	前回	今回	前回	今回	上段：内閣府推計	下段：弊所推計	
実質域内総支出	1.2	1.2	2.0	2.0	1.8	1.8	1.2	1.9	1.8
（変化率（%）、括弧内は寄与度）									
民間最終消費支出	0.4 (0.2)	0.4 (0.2)	1.3 (0.7)	1.3 (0.7)	1.4 (0.8)	1.5 (0.8)	0.3 0.3	1.2 1.1	1.4 1.1
民間住宅	5.7 (0.1)	5.7 (0.1)	0.5 (0.0)	0.5 (0.0)	0.5 (0.0)	-1.9 (0.0)	6.2 6.2	1.1 0.6	0.6 -2.6
民間企業設備	1.9 (0.3)	1.9 (0.3)	3.8 (0.6)	3.9 (0.6)	2.2 (0.4)	3.5 (0.5)	1.2 1.2	3.4 3.6	3.9 3.4
公需	(0.2)	(0.2)	(0.2)	(0.2)	(0.2)	(0.2)	(0.1) (0.1)	(0.3) (0.2)	(0.1) (0.0)
外需等	(0.4)	(0.4)	(0.6)	(0.6)	(0.4)	(0.4)	(0.5) (0.5)	(0.3) (0.5)	(0.2) (0.3)

（注1）公需は、政府消費、公的固定資本形成の寄与度。

（注2）外需等は、移輸出から移輸入を控除した移輸出（純）等の寄与度。

（注3）端数処理の関係で合計が一致しないことがある。

（注4）参考値として、実質域内総生産（連鎖方式、2005年基準）の見通しも公表する。

ただし、県民経済計算では、支出側系列については、連鎖方式では推計していないため、本見通しも総生産のみとする。

【参考】東海3県（連鎖方式、2005年基準）

	2016	2017	2018
実質域内総生産	1.3	2.2	1.9

【参考】岐阜県、愛知県、三重県の経済見通し

	2017年度	2018年度
東海3県（再掲）	2.0	1.8
岐阜県	1.6	1.4
愛知県	2.3	2.0
三重県	1.5	1.7

（注1）岐阜県の経済見通しの詳細については、弊所「2017・2018年度 経済見通し（岐阜県）」を参照。

（注2）愛知県の経済見通しの詳細については、弊所「2017・2018年度 経済見通し（愛知県）」を参照。

（注3）三重県の経済見通しの詳細については、弊所「2017・2018年度 経済見通し（三重県）」を参照。

【前提】北陸3県の前提を参照のこと。

業業績の改善により、生産や設備投資が着実に増加する。

家計部門では、引き続き、雇用・所得環境が着実に改善することから、個人消費はプラスに寄与する。

その結果、東海3県の実質経済成長率は、前年度比+2.0%と3年連続のプラス成長を見込む。各需要項目の寄与度を見ると、民間最終消費支出、民間企業設備がそれぞれ+0.7%ポイント、+0.6%ポイント、外需等が+0.6%ポイントと、民間需要、外需ともに成長に寄与する。

◆2018年度

東海3県経済は、消費の更なる拡大と世界経済の堅調な推移を背景に、緩やかな回復が続き、前年度比+1.8%

前回経済見通し（年央試算）との比較では、成長率に変更はない。足元の増勢を受けて、企業の2018年度設備投資の見通しを前回想定よりも上方修正したことから、民間企業設備のプラス寄与が大きくなったが、住宅着工の想定以上の落ち込みや、内需拡大に伴う輸入増が見込まれることから、その分が相殺された。

世界経済が堅調に推移する中、企業部門では、引き続き輸出や生産が増加していく。企業業績は引き続き堅調に推移し、人手不足に伴う自動化や省力化などの設備投資が増加する。

家計部門では、所得環境が緩やかに改善していくことから、個人消費も着実に増加する。

その結果、東海3県の実質経済成長率は、前年度比+1.8%と4年連続のプラス成長を見込む。各需要項目の寄与度を見ると、民間最終消費支出、民間企業設備がそれぞれ+0.8%ポイント、+0.5%ポイント、外需等が+0.4%ポイントと、2017年度と比べると、民間企業設備と外需等がやや減速するが、引き続き、民間需要、外需ともに成長に寄与する。

なお、①欧米の経済政策などが国際金融市場などに与える影響、②地政学リスク、③中国経済の下振れリスク、④企業部門における人手不足の深刻化、などが懸念材料として挙げられる。

4. 中部5県

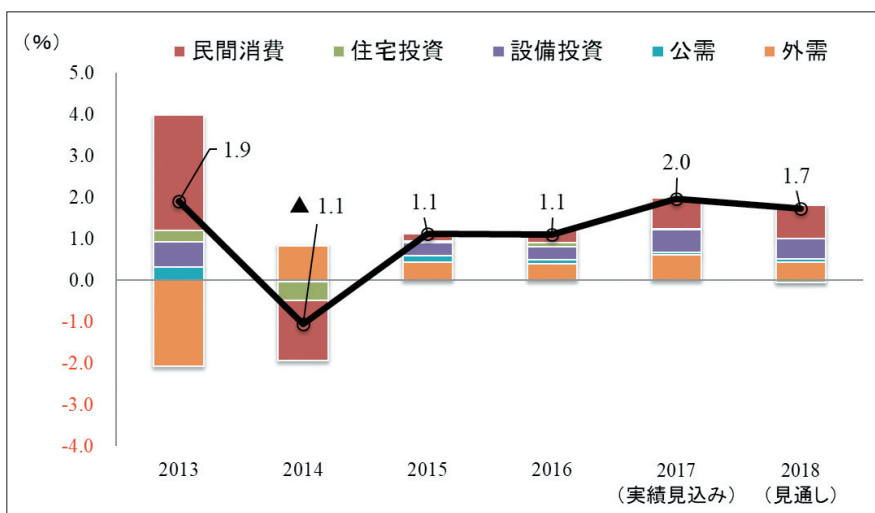
◆2017年度

中部5県経済は、消費の着実な拡大と輸出の堅調な増加で、緩やかな回復が続き、前年度比+2.0%

前回経済見通し（年央改定）との比較では、成長率に変更はない。企業の2017年度設備投資計画の上方修正や、世界経済の足元での堅調さは、前回想定していたとおりである。

世界経済が堅調に推移する中、円相場が円安傾向で推移することもあり、輸出の堅調な増加と企業業績の改善により、生産や設備投資が着実に増

図4 中部5県の成長率と寄与度



加する。

家計部門では、引き続き、雇用・所得環境が着実に改善することから、個人消費はプラスに寄与する。

その結果、中部5県の実質経済成長率は、前年度比+2.0%と3年連続のプラス成長を見込む。各需要項目の寄与度を見ると、民間最終消費支出、民間企業設備がそれぞれ+0.7%ポイント、+0.5%ポイント、外需等が+0.6%ポイントと、民間

需要、外需ともに成長に寄与する。

◆2018年度

中部5県経済は、消費の更なる拡大と世界経済の堅調な推移を背景に、緩やかな回復が続き、前年度比+1.7%

前回経済見通し（年央試算）との比較では、住宅着工の想定以上の落ち込みを受けて、成長率を-0.1ポイント下方修正した。足元の増勢を受け

計数表

※ 表中の「前回」は2017年9月7日公表の経済見通し（年央改訂・試算）

	中部5県（固定基準年方式、2005年基準）						【参考】全国		
	2016年度 （実績）		2017年度 （実績見込み）		2018年度 （見通し）		2016年度	2017年度	2018年度
	前回	今回	前回	今回	前回	今回	上段：内閣府推計 下段：弊所推計		
実質域内総支出	1.1	1.1	2.0	2.0	1.8	1.7	1.2	1.9	1.8
（変化率（%）、括弧内は寄与度）									
民間最終消費支出	0.4 (0.3)	0.4 (0.3)	1.3 (0.7)	1.3 (0.7)	1.4 (0.8)	1.4 (0.8)	0.3 0.3	1.2 1.1	1.4 1.1
民間住宅	5.8 (0.1)	5.8 (0.1)	0.6 (0.0)	0.5 (0.0)	0.5 (0.0)	-1.9 (-0.1)	6.2 6.2	1.1 0.6	0.6 -2.6
民間企業設備	1.9 (0.3)	1.9 (0.3)	3.7 (0.5)	3.8 (0.5)	2.5 (0.4)	3.4 (0.5)	1.2 1.2	3.4 3.6	3.9 3.4
公需	(0.1)	(0.1)	(0.1)	(0.1)	(0.1)	(0.1)	(0.1) (0.1)	(0.3) (0.2)	(0.1) (0.0)
外需等	(0.4)	(0.4)	(0.6)	(0.6)	(0.4)	(0.4)	(0.5) (0.5)	(0.3) (0.5)	(0.2) (0.3)

- (注1) 公需は、政府消費、公的固定資本形成の寄与度。
- (注2) 外需等は、移輸出から移輸入を控除した移輸出（純）等の寄与度。
- (注3) 端数処理の関係で合計が一致しないことがある。
- (注4) 参考値として、実質域内総生産（連鎖方式、2005年基準）の見通しも公表する。
ただし、県民経済計算では、支出側系列については、連鎖方式では推計していないため、本見通しも総生産のみとする。

【参考】中部5県（連鎖方式、2005年基準）			
	2016	2017	2018
実質域内総生産	1.3	2.2	1.8

【参考】長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県の経済見通し

	2017年度	2018年度
中部5県（再掲）	2.0	1.7
長野県	1.4	1.2
岐阜県	1.6	1.4
静岡県	2.0	1.6
愛知県	2.3	2.0
三重県	1.5	1.7

- (注1) 長野県の経済見通しの詳細については、弊所「2017・2018年度 経済見通し（長野県）」を参照。
- (注2) 岐阜県の経済見通しの詳細については、弊所「2017・2018年度 経済見通し（岐阜県）」を参照。
- (注3) 静岡県の経済見通しの詳細については、弊所「2017・2018年度 経済見通し（静岡県）」を参照。
- (注4) 愛知県の経済見通しの詳細については、弊所「2017・2018年度 経済見通し（愛知県）」を参照。
- (注5) 三重県の経済見通しの詳細については、弊所「2017・2018年度 経済見通し（三重県）」を参照。

【前提】北陸3県の前提を参照のこと。

て、企業の2018年度設備投資の見通しを前回想定よりも上方修正したことから、民間企業設備のプラス寄与が大きくなったが、民間住宅の寄与がマイナス寄与となった。

世界経済が堅調に推移する中、企業部門では、引き続き輸出や生産が増加していく。企業業績は引き続き堅調に推移し、人手不足に伴う自動化や省力化などの設備投資が増加する。

家計部門では、所得環境が緩やかに改善していくことから、個人消費も着実に増加する。

その結果、中部5県の実質経済成長率は、前年度比+1.7%と4年連続のプラス成長を見込む。

各需要項目の寄与度を見ると、民間最終消費支出、民間企業設備がそれぞれ+0.8%ポイント、+0.5%ポイント、外需等が+0.4%ポイントと、2017年度と比べると、外需等がやや減速するが、引き続き、民間需要、外需ともに成長に寄与する。

なお、①欧米の経済政策などが国際金融市場などに与える影響、②地政学リスク、③中国経済の下振れリスク、④企業部門における人手不足の深刻化、などが懸念材料として挙げられる。